



Title	21世紀英語教育の行方
Author(s)	齊藤, 隆文
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2001, 25, p. 25-41
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99248">https://hdl.handle.net/11094/99248</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 21 世紀英語教育の行方

齊藤 隆文

### I

新しい世紀を迎えるにあたって、21世紀の語学学習がどのような姿をしているのか根本から考えてみることは、語学教育に関わるものとして興味のある問題である。と同時に現実に語学教育に携わり、日常のいろいろな問題を次から次へと処理しなければならない現場の教師にとっては、いまさらなにをとという問題でもあろう。語学教育は意義があるということについて疑念の余地がない以上、いまさらその意義を問い直すなどという暇があったら、いかにしてそれを効果あるものにするかをもっと真剣に考えろと言われるのがおちであろう。それにもかかわらず筆者があえてこのような問題をここで取り上げようとしているのは、20世紀後半の情報革命ともいべき科学の進歩をみていると、これが語学教育に影響をもたらさないとはどうしても思えないからである。20年前には考えられもしなかったような、さまざまな情報機器が世に出てきている。ワープロなどはもはや昔のものになりつつあるくらいで、最近では語学に直接関係するものとして、自動翻訳なるものが登場している。これは10年ほど前から時々新聞紙上ににぎわし始めていたのだがそのときには非常に未熟な翻訳しか出来ないしろ物であった。語学教師としては、歯牙にもかけなかったというのが本当だろう。

ところが最近の自動翻訳はそれほど侮れるものでもないらしいことがわかっ

てきた。日常的な文や、科学的な文はかなり翻訳が出来るらしいのである。こういう自動翻訳のソフトはいいものはまだ高そうだが、ワープロの例を見てもあと10年もすれば、学生でも十分に手の届く製品が現れるのはほとんど確実ではないだろうか。(便宜上、ここでは日本語と英語に問題を絞るが、どの言語でも同じことが遅かれ早かれ起こるだろうと思われる)。しかももっとさまざまな分野の文をより正確に翻訳ができるようになるだろう。そのとき学生は与えられたテキストとどう取り組むか。自分のコンピューターにそれをやらせるという事態が生じないとも限らない。とくに文字認識装置が一般的なものになっていけば、かならずやそれを使ってコンピューターに与えられた文を読み込ませ、自動翻訳をさせる学生が出てきても不思議はない。あるいはもっと小型の装置が発明されれば、どこででもそれを使って翻訳が可能になってくる。学生のみならずあらゆる人が重宝しないはずはない。

文学関係の専攻である筆者としては一昔前はコンピューターによる自動翻訳などというものは、すくなくとも文学に関しては決して出来はしないと思ったものである。その理由は次の通りである。新聞のような日常的な文章、科学分野の文章、その他情報の内容のみが大きな意味を持つ文章は確かに翻訳されやすいであろう。ところが文学は、文章そのものが時に情緒的であるのみならず、独特な表現そのものに意義があることが多く文法的な解析に向かない文が多いということである。さらにネイティブでも苦しむような、たとえばウォルター・ペイターのような一ページもピリオドがないような文を翻訳機が処理できるはずがないということである。さらには翻訳された文の文体も問題になる。

しかしながらこのような自動翻訳に対する批判自体いくつかの問題点を抱えている。ひとつは最近のコンセンサスとして、語学教育は文学教育とは直接の関係がないということがある。文学の翻訳が出来ないからと言って、コンピューターが語学教育に直接影響を及ぼさないと結論するのはそもそも前提が間違っているということになる。では本当にコンピューターが将来も文学的な文章を処理できないのか、これも実際のところ分らない。というのは

いまの議論はコンピューターが、ある文学作品をまったく一から新しく処理することを前提にしている。しかしもしコンピューターの記憶容量がさらに拡大して、過去の主な文学作品の名翻訳のすべてをデータとして記憶するような事態になったらどうだろう。ある名作の文章をコンピューターにかけたらすぐに名翻訳が現れるに違いない。“If winter comes, can spring be far behind?”を自動翻訳機にかけたら、「冬来たりなば春遠からじ」という名訳がたちどころに現れてくることになる。半導体素子の記憶量がすさまじい勢いで拡大をしていくのを見ているとこのことが本当に実現しても不思議はないと思えてくる。さらに未翻訳の文学作品でも、ある程度の質の機械翻訳ができるようになる可能性がある。現代作品は昔のような凝った文体を使っていないことが多いし、文章もそう長くないものが多いので処理しやすくなってきたはずである。

そのように考えると、自動翻訳はほとんどの翻訳に有効となってくるのではなかろうか。残る分野としてあえてあげれば、新しく生み出される文学で、その中でも特に文体に凝ったものや、韻文などということになってくる。しかしこうした分野のものはもはや一般的な語学教育とはかかわりのないものであり、まず使われることがない。このように見てくると自動翻訳が将来語学教育に与える影響はやはり無視できないことになる。教室での翻訳を中心とした授業には、その意義の検討も含めて、決定的な影響が出てくるに違いない。

文章の翻訳に関して、自動翻訳が大きな意味を持つてくるとすれば、もうひとつの語学教育の柱、コミュニケーション学習についてはどうだろう。この分野に将来情報機器の導入はありえないのであろうか。それに関してはまだ流暢に会話をする機械が発明されたという話は聞かない。しかしこれにつなげていく動きは見られる。たとえば音声認識装置というのがいま市販されているが、これは発話を分析し、それを画面で文章化するというものである。この装置はまだまだ改良の余地があり、だれの音声でも認識できるようなことにはなっていないが、そのうちにだれが発言しても、それを文字の形

に変えて表現する装置が現れてくるに違いない。そして一旦意味が分析されてそれが文字に置き換えられれば、それを他言語に翻訳するには、自動翻訳装置を使えばいいわけである。それを合成された音声で発音できる装置は割合簡単に出来てくるであろうから、そうすると日本語で発言し、それが日本語の文章として表示され、それが英語に自動翻訳され、発話される、という自動通訳の一連の過程が完結するわけである。もちろん英語から日本語への自動通訳も可能となるであろうから、これで会話が成り立つことになる。ただしこの自動通訳を行う時間が、大幅に短縮され、発言とほぼ同時の通訳でなければあまり役には立たないので、これが実用化されるには時間がかかるかも知れない。またその装置の大きさも問題である。日常会話に使えるほどの大きさの自動通訳装置というのは今はまだ夢のような装置に違いない。しかし集積回路の大幅な向上が図られれば、それも可能となるだろう。いまのウォークマンのようなものになる可能性があるし、最終的にそれくらいの大きさにならないと実用的ではない。集音マイクを胸のあたりにつけておいて、集めた音声を自動通訳装置に送り、翻訳し、それを音声化してイヤホンで聞くというスタイルである。この時のイヤホンで聞く音声は発話者の声の質をベースにして合成されたものであればなお良いと言えよう。

こうした装置が発明された場合、それが実際に日常生活で使用されるようになるであろうか。筆者はそうなると思われる。機械を通して会話をしても味気ないし、心の通い合う本当の会話にはならないというような意見が必ず出されるに違いない。しかしいまでも洋画を見るときには、大方の人は字幕を通して見、感動しているのである。あるいはふき替えた映画でも我々は感動しているはずである。吹き替えた声優の声のほうが元の俳優の声よりさらに良いという場合もあったくらいである。機械を通したから心が通わないなどということにはならない。実際のコミュニケーションは、発話の内容のみならず、発話の調子、相手の表情、ジェスチャー、周囲の状況などを通して全体として行われるものである。発話の内容以外は五感で認識できるものであるから、内容さえ通訳されれば全体としてのコミュニケーション成立に障

害はないと思われる。コミュニケーションが成り立たないとすれば、むしろ片方が他方の発言の内容を理解し得ないような場合など、両者の教養の差が原因となる可能性が強い。また言語の違う人と親密になり、自動通訳機を通すような会話を望まない場合も出てくることだろう。この場合はお互いにいずれか、あるいは双方の言語を習得したいという願望があり、手本が常に身近にいるのだから、日常会話レベルまでの言語習得は割合簡単にできるだろう。それ以上のレベルの会話、たとえば専門性の高い内容のものなどは日常生活ではほとんど不要であるから問題は生じないと思われる。しかし、この例をもって通訳装置の無用を証明することにはならない。

さてこうした装置が発明されたときに、語学教育への影響はどのようなものになるであろうか。これを考える前にまず日本における語学教育の現状と問題点を整理しておきたい。

## II

今日英語圏を除く国々では多かれ少なかれ英語を学ぶ状況が生まれているが、日本でも中学から始まって大学までの英語教育も含めると、かなりの時間を英語学習に使っている。そのうえ受験の準備で英語を学習する時間や、会話学校に通ったりする場合も含めると、膨大な時間を英語の習得に使っているといえるだろう。英語の習得という場合読み書きの能力とコミュニケーション能力とに分けられる。従来から英語の学習は読み書きが中心になってきたが、最近では生きた英語を学ぶということで会話能力をつける必要性が叫ばれ、中高でも会話の授業が行われることが多くなってきた。しかしながらこの会話、いいかえれば日常会話というのが一筋縄ではいかないことがあまり問題にされないのは不可解な話である。単語も易しく、構造も易しい文を使う日常会話の能力ぐらい6年間もあれば簡単に達成できそうに思われているのかもしれない。しかしながら日本においてむしろ日常会話ほど習得が難しいものはないのではなかろうか。とりわけ相手の発言の聞き取りが大きく

な問題となる。話す場合は、話す本人が表現や語彙を選択できるのに反して、聞く場合は、相手の使う言葉が千差万別であるからである。実際の会話ではさまざまな年齢、教育歴、社会的背景などを持った人と会話することになるが、そのそれぞれの個人差が非常に大きい。それは発音に関しても言えるし、表現の選択、あるいは会話のスピードについても言える。これらさまざまな英語を聞き取れるように訓練するというのはほぼ不可能ではないかと思われる。もちろん子供を含めたさまざまな人々に同じ内容の発話をしてもらいそれを使って訓練するという方法もあるけれども、かなりの困難を伴うのは避けられない。

そのうえテープなどを使用しての学習の問題点は、言葉を使う切実感が乏しいことである。人間はいろいろな場面でいろいろな人と話し、さまざまな感情を抱きながら、それに結び付けて言葉を学習していく。特に日常使う言葉はそうである。そうではなく知識として、いわば間接的な形で日常の言葉を習得してもなかなか使えるようにならないのは当然のことであろう。たとえば本当に日常会話に習熟したならば、いわゆる f—, s— などの4文字言葉をネイティブ並に適切な場面で使用できるようになるはずであるが、間接体験として会話を勉強した人にとってかなりの抵抗なしにこれを相手にぶつけることは難しい。さらにジェスチャーや話す態度や表情などの問題がある。こうしたものは間接体験で学ぶのはほとんど不可能ではないだろうか。会話をかなり学習した人でも、相手のいうことが理解できない場合、下を向いたり、横を向いてしまう人が多いと外国人からよく話を聞くが、これは英語を話す態度としては相手に不快感を与えてしまうことになる。そうした基本的な問題が生じるのもやはり会話を間接体験として学んでいるからではないだろうか。

次に問題となるのは、日本で学習する英語はたいていの場合米語にしる英語にしる標準語だと言うことである。ところが海外で聞く英語は標準語であることがまれで、たいていは何らかの方言で話される。話は少しそれるが、この方言というものはたとえばイギリスのようなそう広くない国においても、

かなり大きな問題であるらしい。特に地方から都市に出てきた場合など、自分の話す方言にかなりの劣等感をいただくようである。筆者が実際体験したことだが、ケンブリッジ大学の英文科の授業で、ある教師が学生に配布した英詩の朗読をするように求めたことがあった。すると、前2列に座って授業を受けていた学生5、6人がことごとくそれを辞退したのである。その理由がそれらの大学生が地方出身のため、方言交じりの朗読しかできないからということであった。会話を成り立たせるためには、イギリス国内でも問題となるようなこうした方言まで聞き取れるようになる必要があるのである。日本で学習して、英米人と自在な会話ができるようになるだろうと簡単に考えるほうがどこかおかしい。他方直接ネイティブから会話を習った場合は、確かにインセンティブは与えられるので上達の程度は早いだろうが、それでも方言の問題や個人差の問題は解決されないだろうと思われる。

もちろん中高6年あるいはその後も日常会話習得の努力をしたとすれば、たしかにその効果はないとはいえない。しかし先ほどから述べてきたように、学習者がどんな場面でも会話ができると自信を持てるような段階には結局は到達しないのではないだろうか。以前日米通商摩擦が激化したころ日米をテレビ中継で結んで議論しあうというNHKの番組があった。日本側からは数人のおそらくこの問題の専門家であり、英語もできるであろうとみなされている人が出席し、アメリカの会場にいる人々の質問に答えるような形をとったものであった。議論が英語で行われること、アメリカの視聴者が素人で新聞くらいしか読んでいない人々であり、また冷静な判断ができるような雰囲気ではなかったということ、などを考えるとこの番組そのものがアメリカ人の怒りを増幅させるために企画されたと思えないようなものであったが、それはさておき、この番組で確かにその目的は達せられたように思えた。というのは日本側の中年の代表者である男性は、たどたどしい話し振りであるばかりでなく、その英語の不安さが、そのまま発話内容に対する不安となったとしか考えられないような自信のない口調でアメリカ人の怒気を含んだ質問に答えつづけたからである。その回答が非難され続けるとさらに悪いこと



に、うつむいたままほとんどしゃべらなくなってしまったのである。これではアメリカ人からすれば日本人の代表が自らの非を認め、もはや有罪であることを告白したととられてしまうのも当然の場面であった。摩擦がさらに悪化していくのは必至のことであると思われた。自身の会話能力と相手の態度や考え方、ジェスチャーなどについてこれほど無神経な人が日本の代表としてテレビに登場するのであるから、一般的な日本人が会話をただむやみに習っても、そのいく末は見えているといえよう。

話は戻るが日常会話の学習において、さらに問題となるのが、たとえ少し話せたり聞き取れるようになったとしても、今度はその能力を保持するのが大変なことである。会話の学習も楽器の学習と同じで、たえずその言葉を使い練習していないと出来なくなってしまうからである。本ならいつでも読めるので、英語を読む能力を保つのは比較的たやすい。だが一人で会話をするわけにもいかないのだから、会話を習ってもその能力を保持するには会話学校に通い続けるなどそれなりの厳しい努力を要する。いわばお稽古事を一生続けていくようなことになってしまうわけである。

以上のようなことを考えると、たとえ中学高校大学で会話学習が行われても、十分に使えるようになるとは思えないし、ましてやそれを責めるのは酷ではないかと思われる。日本語でさえ、地方の人が東京へ出てなまりを直そうとするとかなりの努力が必要なのである。結局本当に英米人と対等に話せる英会話能力を身に付けることができるのは、海外で生活するか、絶えず外国人と接する環境にいる人の場合かどちらかに限られるだろう。もちろんあまり長く海外に生活すると日本語を忘れてしまうというような別の問題もあるが。

こう見てくると中学高校で会話の学習が行われても成果は限られるし、その後社会や大学で勉強を続けない場合は、その会話能力が急速に失われていくのは仕方のないことであろう。日本語しか話さない環境におかれている大多数の人が英会話能力を保持しえると考えるのは幻想に過ぎないと思われる。仕事の变化などで英語を使用する状況におかれた場合はその6年間に習った

会話も少しは生きてくる可能性はあるだろう。しかしその準備のために全員に会話の学習をさせる必要があるとはとうてい思えない。

コミュニケーションを学ぶことが問題だと言っているのではない。結局のところコミュニケーションを学ぶということが、生きた英語というあいまいな表現の下に、日常会話学習に短絡的に結び付けられるということが問題なのである。もちろんコミュニケーション学習が、会話学習をも含んでいるのは確かだが、日本の現状では日常会話を本当の意味で習得できるはずもないし、それが出来ないということを認識した上で学ぶなら学ぶべきだということである。そうすれば会話を習っても、なかなか通じないといって自信を失うこともなくなるだろうし、また学校教育が生きた英語を教えていないという、いわれのない非難を受けなくてすむだろう。

それではコミュニケーション学習というものをどう考えるべきであろうか。コミュニケーションとは確かに個人対個人の間で交わされる日常会話を指す場合もあるけれども、それだけでなく、複数の人々に語りかける言葉やそれを聞くことも含まれているはずである。日常会話が個人対個人の間で行われるものであり、多くの個人的な癖や、方言、しぐさ、感情表現を伴うことが多いのに反し、複数の人に語りかける言葉は、多くの人が聞くという前提に立つために極力個人的な口調や方言などを避けようとするはずである。極端な例はアナウンサーであろうがそれでなくても、演説、講演、説明など複数の人々に語りかける場合は、その話し方は標準語に近くなる。感情表現すらも、例の4文字言葉などの極端なものは避けられるのが普通だと思われる。つまり日本でコミュニケーションを学ぶということが、複数の人に語りかける言葉を学ぶことだと考えれば、日常会話を学ぶときに伴う問題を避けうるのである。それによってまた日本でのコミュニケーション学習の成果のあり方もはっきりするのではないだろうか。コミュニケーション重視の理由として、相手の意見を理解できたり、日本文化を発信できるようになることがあるはずだが、日常会話よりもむしろ複数に語りかける言葉を学ぶほうがよりその目的にかなっているように思われる。その結果として、たとえばイギリ

ス旅行で現地の田舎老人とうまく会話が交わせなかったとしても、英米のテレビニュースが理解できるようになったり、また人の前で自分の趣味を説明できるようになることのほうがずっと望ましいのではないだろうか。

日本でのコミュニケーションの学習を複数の人々に話しかける言葉を学ぶことと規定すれば、現在の学校教育でそれを達成するための大きな障害はなくなると思われる。標準的な発音の入った視聴覚教材を使えるし、感情表現にともなう英米人の表情やしぐさを日本人教師が無理に実践する必要も大幅に削減されよう。もちろん英語を話す上でのいくつかの基本的な表情や態度は指導する必要はあるだろうが。

ネイティブがいる場合でもそういう学習の目的を理解してもらったうえで指導をしてもらうほうが、とりとめなく日常会話を教えるよりも効果が上がると考えられる。又あるまとまった内容をもつ発話の聞き取りをしたり、あるいはあるまとまった内容を発言する練習をするほうが、断片的な内容しか持たない日常会話の練習よりも情報の充実や自己発信という意味でより大きな成果が期待できると思われる。

その上こうした複数に語りかける言葉の練習は、読み書きの練習と直結している、いやむしろ、読み書きの延長上にあるといってもいいだろう。通じる英語を学ばなくてはならないという脅迫観念めいたもののために会話的な文章が教科書などによく登場するようになり、それにつれて読解や英作文が質量ともに軽んじられるような傾向が最近みられる。しかし実際に今まで外国文化を学んできたのは日常会話によってではないように、自己発信をしたり、日本文化を説明できるのも決して断片的な内容の日常会話によってではないだろう。ある程度以上の内容を扱えるのは結局文章の形でしかありえないし、それゆえに英文解釈や英作文といった従来における学習方法は決してまちがっていたとは思えないのである。問題があったとすれば、いままでは学んできた英文解釈や英作文を文字の領域にとどめてきたということであろう。まとまった英文を耳から聞き、書いた英文を正しい発音で発声するというような練習ができていなかったということである。従来教科書など

にはその内容を録音したテープなどがついていなければならない、たいていの場合それは必ず利用すべきものとして扱われてこなかったし、英作文を書いてもそれを発言の形にして練習することはあまりなかったように思われる。とりわけ、入試において、音声を使用した英文把握なり、発話の試験が課されてこなかったこともその傾向を助長してきたように思われる。現在では視聴覚機器の充実により、聞き取りや発音の矯正などは簡単にできるようになっている。日本での試験のあり方を若干変え、コミュニケーションという言葉の中身を明確にするだけで、大きな改革をしなくともかなりの英語教育の充実がはかられるのではないだろうか。複数に語りかける言葉を学ぶことに徹すれば、従来の読み書きの延長上に、自己発信型の英語能力と、内容をもった英語の聞き取りの能力が、そう突飛なことをせずとも養成されうるように思われる。その意味では、使える英語を学ぶという掛け声のもとに無思慮に日常会話を入学試験に取り入れるようなことは、間違ったメッセージを世間に送ることになり、問題の解決をより困難にしてしまう行為だろう。

読解や英作文がやや軽視されつつあるのに伴って、もうひとつの問題は従来行われていた英文法の授業がかなりの学校で減りつつあるということである。これもある意味で生きた英語重視からでてきた現象であろうと思われる。日常会話は確かに直接体験による帰納的な方法によってしかうまく学べない。しかし読解や英作文を学ぶ場合は、やはり最低限の文章構成に関する文法を学ぶほうがずっと効果的効率的ではないだろうか。実際問題として、最近の大学生のなかにはたとえば分詞構文がなんなのか仮定法がなんのかを知らない者が増えてきている。そのためにある文を説明しようとしても、文法という共通ルールが使えないために、ただ漠然とその文の意味を繰り返して説明するという事しかできなくなってしまう。ネイティブ同士であれば文法を直感的に把握しているから、それである文を双方が了解できるかもしれないが、日本人が難しい英文を理解しようとする場合、それでは納得するものにならないと考えられる。また英作文を書く場合でも文法を知らないと不便だし、何回も間違いをし、手直しをしてもらってやっとある規則を学

ぶというのはかなりの時間の浪費であろうと思われる。やはり最低限の文法は学校できっちりと学ぶべきではないだろうか。もちろんここでいう文法とは、実用的なものであると同時に、文章構成を把握するのに必要な最低限の文法のことを言っているのであって、決して文法のための文法のことではない。

### III

以上日本における英語教育の現状と問題点を考えてきたが、次に最初に述べたようなコンピューターの発達によって、長期的に見れば英語教育のあり方に大きな変化が生じるのではないか、またその場合どういうあり方が考えられるかを検討してみたい。そのようなことは今から考えてもどうなるものでもない、という考え方もありえないではない。しかしながら、大きな変化が起きてからそれに対処するというのは賢明とはいえないし、またその変化は意外と早いかもしれない。辞書にしても、ほんの数年前までは、電子辞書の存在は書物の辞書の意義をどうこうするほどのものではなかったが、最近では電子辞書を使用する学生が半数を占めつつあるのではないかというほどの変化である。確かに電子辞書の方が、速いし、携帯性も良いし、また同義語などもすぐに探せるし、そのうえ、国語辞典なども一緒に入っているのだから、これを使うなという方が無理であろう。学生の英語の予習風景は以前とはずいぶん変わってしまったのである。

さて自動翻訳機やさらに使用範囲の広い自動通訳機が市販され、電子辞書並に使用されるようになってきた場合どのような社会的影響が出るだろうか。もっとも早く影響が出てくるのは、おそらく一般の人が通う会話学校でありその数は減少していかざるをえないだろう。たまに外国人と交流するために英会話習得に大変な金と時間を使っている人々が、こういう機械が手の届く範囲の値段で、実用に耐えられるくらいの能力になったとき、それを買わないはずがないと思われる。もちろん特別な人間的な付き合いをしたいと考えるひとは常に必ずいてそういう人はその関係のなかで会話を習得していくの

であろうが、大多数の人は機械を使うのではないだろうか。

他方ネイティブの人にとってはこうした機械の開発はそう有難いものではないだろう。彼らにとって英語が国際語であることの利点は計り知れないものがあるといえる。イギリスの会話学校の隆盛にはじまって、シェークスピアなどの劇をみるために世界各国からイギリスを訪れる人々からの観光収入も莫大なものになるだろうし、出版物などでも大きな経済的メリットを得ている。それだけではなく、国際会議などでネイティブの人々が議論そのものとその伝達のための効果的な修辞に集中できるのでに反して、ネイティブでない人はそれらの他に、英語そのものの構成にも大きな労力と注意を払わなくてはならないという点で、前者が心理的かつ事実上の優位を得ている。また国際的な学術関係の論文などを書く場合についても同じことがいえよう。さらに国際的なコミュニケーションの場では、英語で発信されたものが圧倒的な地位を占めている。それによって英米を中心とした英語圏のもの見方が、そのまま世界の主流になっているというのが現在の姿であろう。TOEICなどの英語検定試験においても、ヒアリングはあっても話すという試験はなく、外国人は黙って聞くだけにしろと言っているのではと勘ぐってしまうほどである。自動通訳機はこうした諸々のメリットを無効にしてしまいかねないものであるから、おそらく簡単にはそうした状況を受け入れようとはしないであろう。しかしながら、一旦実用的なレベルでそういう機器が開発されたら、もはや逆行はありえないのであるから、たとえば国際電話での自動通訳などから始まって、徐々に受け入れられる方向に向かわざるを得ないだろうと思われる。そうした場合、日本に限っても、会話学校が衰退に向かうのみならず、学校での語学教育のあり方にも大きな影響が出てくると考えられる。

たとえば卒業してからも英語をほとんど日常で必要としない人々にとって、大学までの英語教育は必要かという問題が起きてくるであろう。現在は、国際語である英語を学習しておくことは必須のことになっている。英語が国際的に認知されている状況ではいつ必要になるかも知れないから学ぶべきだと

いう大義名分がいわばそこにあるのだが、必要になったときには機械が使えるという状況が定着してくると、そうした大義名分も色あせてくることであろう。また他言語を学ぶということは異文化を学ぶということだからという大義も、大学まで含めた英語学習のための膨大な時間と労力を正当化することはできないであろう。結局は中高、大学までの英語学習の時間を減らす方向にいかざるを得ないのではないだろうか。そして中学から英語を始める場合にも、その目的は国際社会の常識、文化などを学ぶということが中心におかれる。英語の学習としては、基本的な発音文法読解作文などに留まりむしろ英語圏の文化の特徴や、国の慣習、人々の習慣、考え方、マナーなどがその教育の中心になるかもしれない。書いてある内容そのものではなく、その文章の翻訳のみに注意が向いたり、和文の内容よりもその英訳の技術に力点をおくような現在の英語教育と比べ、本来の意味での国際社会理解のための教育が行われることになるであろう。さらに多文化理解ということであるなら、英語だけではなく他の言語文化を選択して学んでも良いであろう。

このように英語という言語そのものに習熟するという大仕事に労力と時間とを割く必要がなくなれば、いまの学校教育での多くの問題のひとつが解決されることになる。すなわち機械にできることがあれば、それにまかせて、人間はもっと創造的な面に力を注ぐことができるということである。科学、社会、人文すべての分野で知識量が増大していく一方であるが、そうしたものを手っ取り早い暗記によってではなく、創造的に学ぶことができればより人間に望ましい教育環境が整うと考えられる。英米でそうした点での教育がより進んでいるのは、外国語習得という大きなハンディキャップを背負っていないというのもその理由のひとつではないかと考えられる。逆に日本での教育で、暗記が重要な要素を占めているのもそれが手っ取り早く多くの知識を吸収できるからであり、今の状況でそれをあながち頭から非難するのも考えものであろう。

さて学校教育で語学習得に費やしていた時間と労力の有効利用が図られるようになり、英語の学習時間が減少することになっても、それで直ちに英語

を学ぶ必要がなくなるというのではない。というのもコンピューターに入力する情報そのものを作成するのが人間である以上その情報に不備のある可能性があるし、また情報そのものも言語の変化とともに新しくしなければならない。そのためには、ある一定数のプロの翻訳家や通訳者が常にいてそういう問題を解決することがどうしても必要であろう。また正式文書や重要書類などの翻訳、間違いが許されない通訳などにおいても、専門家自身が行うかあるいは機械通訳翻訳の結果をチェックする必要があるはずである。その意味から言えば、将来において自動翻訳や通訳がでてきた際には、こうした語学専門家は今よりも一層重要な役割を果たすようになると思われる。そのためには全ての人々がほどほどに英語力を身につけるような形ではなく、専門家養成のコースを学校に設け、語学に優れた人材を英才教育することが必要となるかもしれない。そしてある程度の学習を経た後に、留学などの形で、日常会話のような、ネイティブの中において初めて可能となるような学習の機会を全員に与え、国内で出来ない部分を補完させるべきであろう。

また語学専門家以外にも、外国の言語、文学、文化などを専門とする人々も、その国の言葉に習熟する必要があると思われる。これらを扱う分野はその国の言語表現そのものと密接に結びついている場合が多く、翻訳や通訳をすると失われてしまいかねない要素を含んでいる場合が多いからである。多くの教育機関で語学教育に割く時間が減少するのに反比例して、学校の特別の語学コースや外国語大学などでの語学教育はさらに充実を図ることが要請されるだろうと思われる。いまのような中途半端な語学学習は止めて、人々はその時間をそれぞれの学習や研究により多く振りあてることができると同時に、語学を学ぶような人々にはより一層の学習成果が求められるということであろう。

以上自動翻訳や通訳が登場した場合に、語学教育にどのような変化と問題が生じるかを考えてきたが、こうした観点にたつと、昨今の語学教育は長期的な視点に立って行われようとしているとはとても思えない。何を教えるかについての十分な議論もないままに、小学生にも「生きた」英語を学習させ



るといったようなことが数年以内に始められようとしている。教えるのに必要と思われる教師の数からいっても、日本人教師が当然その任につくのであろうが、普段ネイティブと接触していない人がたとえば日常会話のような、一番やっかいなコミュニケーションをどのようにして生徒たちに誤解を与えずに教え、それがどのような成果を生むというのであろう。まさか日本人の小学生同士が普段英語で会話するような状況を期待してはいないだろう。香港やシンガポール、フィリピンといった英語に接することが日常であるような国においてはそういうこともあるだろうが、それを日本でも期待するというのはどう考えても自然ではない。小学生からの英語教育によって外国人との日常会話が出来ようになるだろうというような意図がもしそこにあるとすれば、それは現状を無視した、誤解に基づく判断であるといえよう。むしろそれほどの予算があるのなら、それを自動翻訳や通訳機の早期の完成に振り向けたほうが現実的ではないかと思われる。

こういう状況からいっても自動翻訳通訳機のできるだけ早期の出現が待たれるし、多くの言語でそれが実現した場合政治的、社会的、文化的に世界に与える影響は計り知れないものになると思われる。言語の違いによる格差がなくなるということは、それぞれの国が対等の条件で発言できる状況がくるということであり、世界の国々の相互理解が革命的に深まるだろう。いわば人類不理解の象徴であるバベルの塔の神話がついに克服されるということなのである。そうはいってもこうした機械がいつ登場するのかはまだ不明のままである。数十年以内には人間の知能を超えるロボットが登場するとされているから、そのときまでには実用に足る自動翻訳通訳機が登場すると期待できるだろう。問題はそれが実際に登場するまでは、英語教育はそのまま続行しなければならないということである。島と島を結ぶ橋が完成するその当日までは、人々は船に頼らざるをえないようなものである。橋の場合は建築の様子や、その効果が単純に分かるので対処しやすいが、この自動翻訳通訳機のような影響の及ぶ範囲が広大なものはなかなか前もってそのいく末を予想するのは困難であろう。しかしながら、そうしたものが実用化されたときの

## 21 世紀英語教育の行方

影響の大きさを考えた場合、やはり今からその対処の方法を視野に入れておくべきだと思われる。そろばんがたちまちのうちに計算機によって駆逐されたような状況が語学教育の世界において起きる可能性がないとは言えないのである。